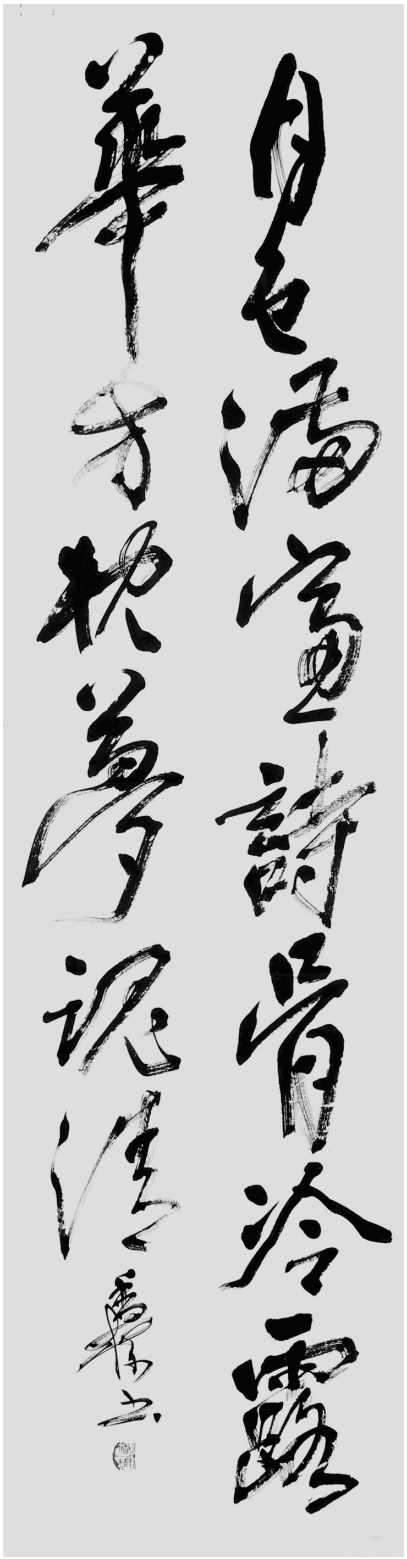
昇試第一部漢字課題　（九月二十二日締切）

A

鈴木静村書

月色滿窓詩骨冷　露華方枕夢魂清（陳普）
月色窓に満ち詩骨冷か、露華枕に方って夢魂清し。

B



髙橋香樹先生書

あっさりというより単調に過ぎた感。みなさんはもっとメリハリを利かせ、あばれてみるのもよい。墨継ぎがハッキリしないこともアクセントに欠ける。**色**の点は最後に。**窓**は〝厶〟を〝口〟にした形。案外書き易い。**冷露**　右下辺では重くならないように。**夢**　変わった形。私の好み、ムリに真似しないこと。

今回は渇筆を多用しました。**月色**　連綿。**色**　小さく。**満窓**　共に草書ですが動き同じになった。変化を。**詩**　は渇筆。**骨**　で墨継ぎ。**冷**　偏と旁の位置関係に注目。**草方**　は渇筆連綿。**枕**　で墨継ぎ小さめに。**夢**　上部小さく冠大きく横に振り強調。

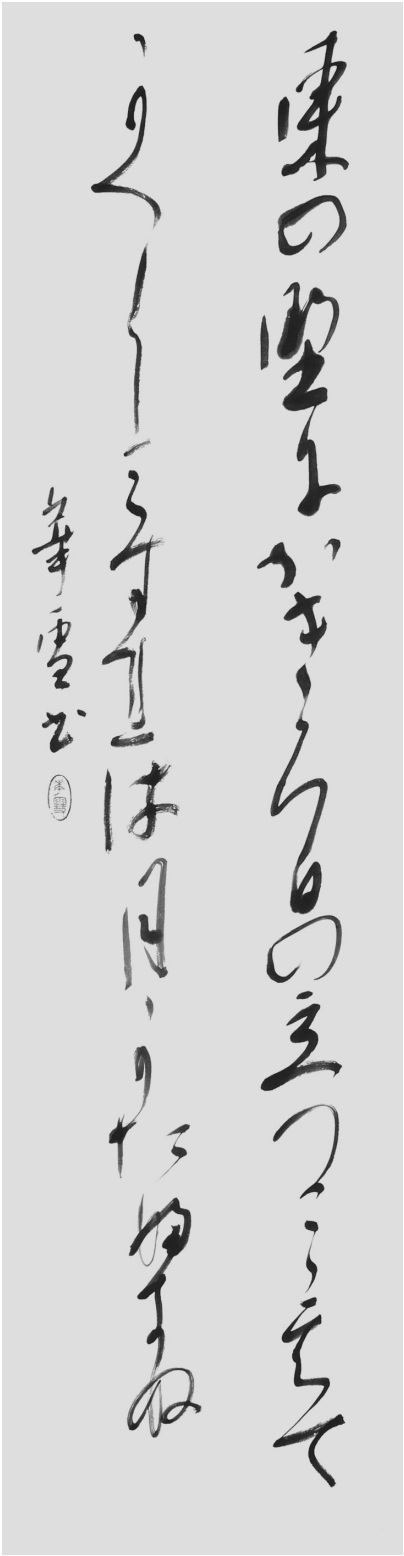
訳…月かげは窓一面に満ちて詩心が冷やかに、露は枕に触れて夢までが清らかである。

予告（十月二十二日締切）　**茲山奇且麗　迥與江村合　幽人去復來　斜陽在孤塔**（袁景休）

◆**注　意**　裏表紙の昇試規定を参照のこと。

昇試第一部かな課題　（九月二十二日締切）

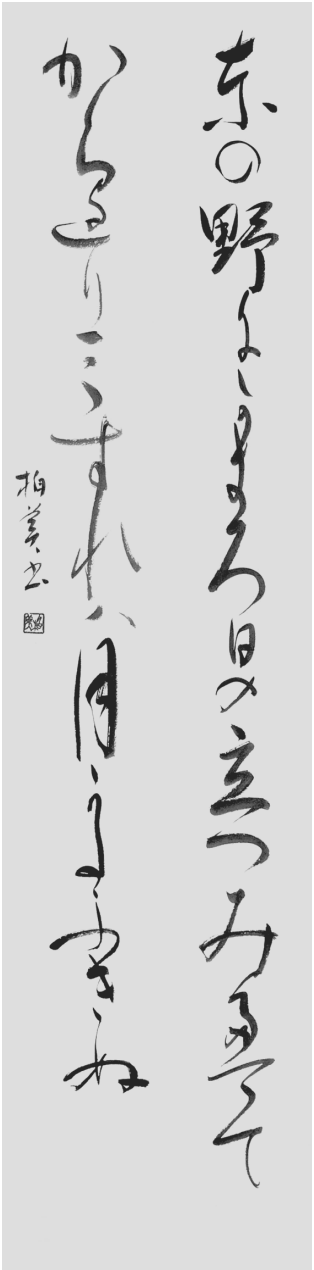
A



平岡華雪先生書

東の野にかぎろひの立つ見えてかへり見すれば月かたぶきぬ（万葉集　柿本人麻呂）
東の野尓かきろ日の立つ三えて可へり三す連は月可た婦支ぬ

B



石島柏美先生書

東の野尓可支ろ日の立つみ盈てか邊り三すれ八月可多ふきぬ

現存最古の歌集である「万葉集」の代表的歌人である柿本人麻呂は持統から文武天皇の時代に宮廷歌人として活躍した。この時期の歌風はおおらかで力強い。「万葉集」に造詣の深い近代歌人の斎藤茂吉は人麻呂の歌風を沈痛、重厚と評している。この歌は軽皇子が安騎の野で狩りをした時の長歌に添えられた反歌四首のうちの一首である。

学び方

東方から曙光がさし西に月が落ちかかるという雄大な歌です。万葉集の名歌なので口ずさみながらリズムの流れをつかみ歌意を感じつつ書きすすめてみて下さい。

書き出しの「**東の野**」は放ち書きです。「**可支ろ日**」「**み盈て**」は軽やかに書きます。左行の「**か邊り三すれ八**」はおおらかにゆっくりと書きます。「**月**」で墨継ぎし「**可多ふきぬ**」を少し右に寄せつつ書き収めます。

今回で私の担当は終わります。毎回私なりに工夫して書きましたが、どうしても我流の字になってしまいました。変化を求め上達を目指すにはやはり日頃の古筆の臨書が欠かせません。自分の好きな古筆に巡り合って何度もくり返し臨書する事をお薦めいたします。

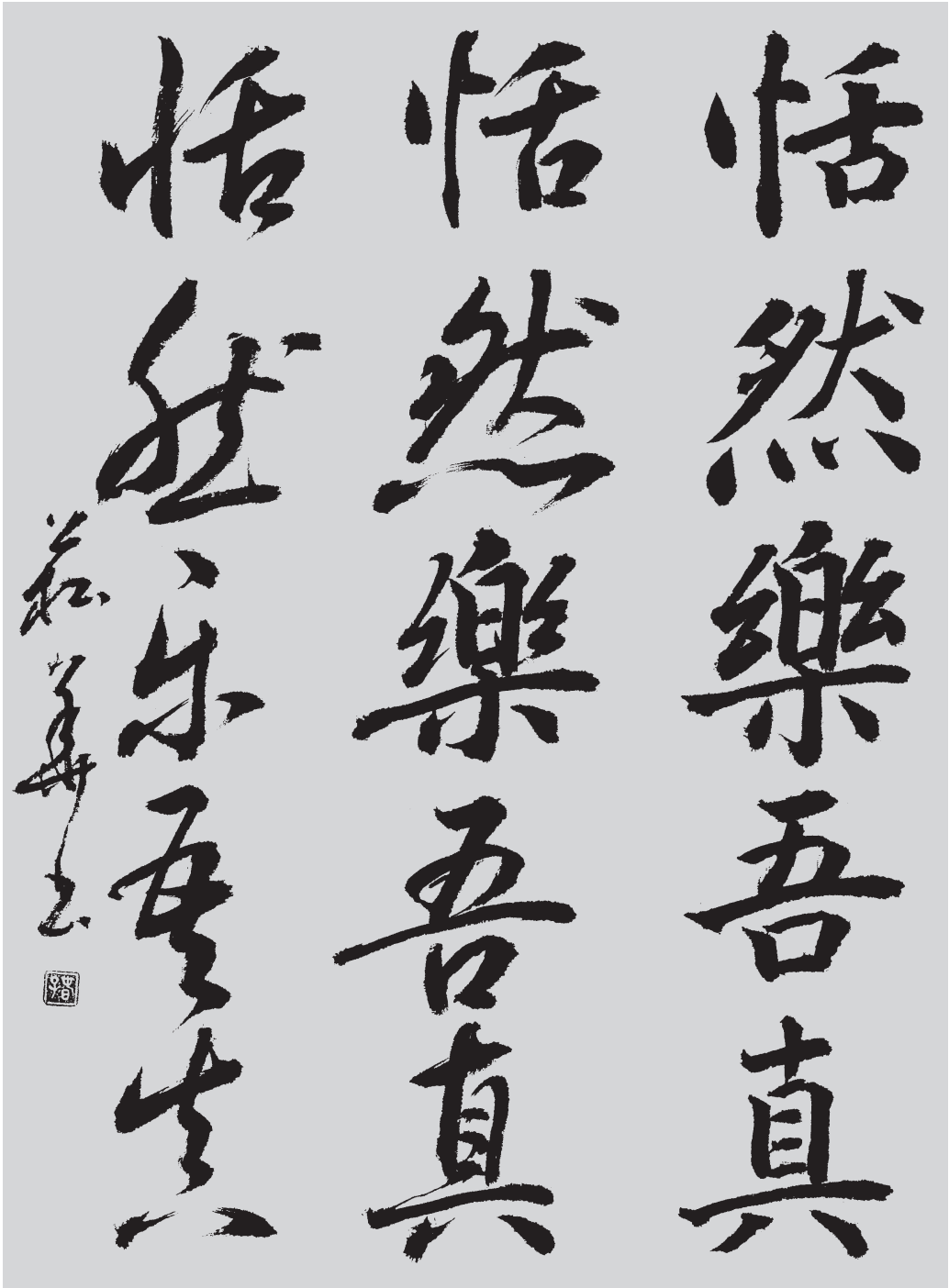
予告（十月二十二日締切）　**やや暫し入日の影をとどめたる山の頂を雲つつむなり（土田耕平）**

◆**注　意**　裏表紙の昇試規定を参照のこと。

昇試第二部漢字課題　（九月二十二日締切）

小暮菘華先生書

恬然樂吾眞（漢王昸）
恬然吾眞（てんぜんわがしん）を楽（たのし）む。



訳…吾が自然のままにやすんじたのしむ。

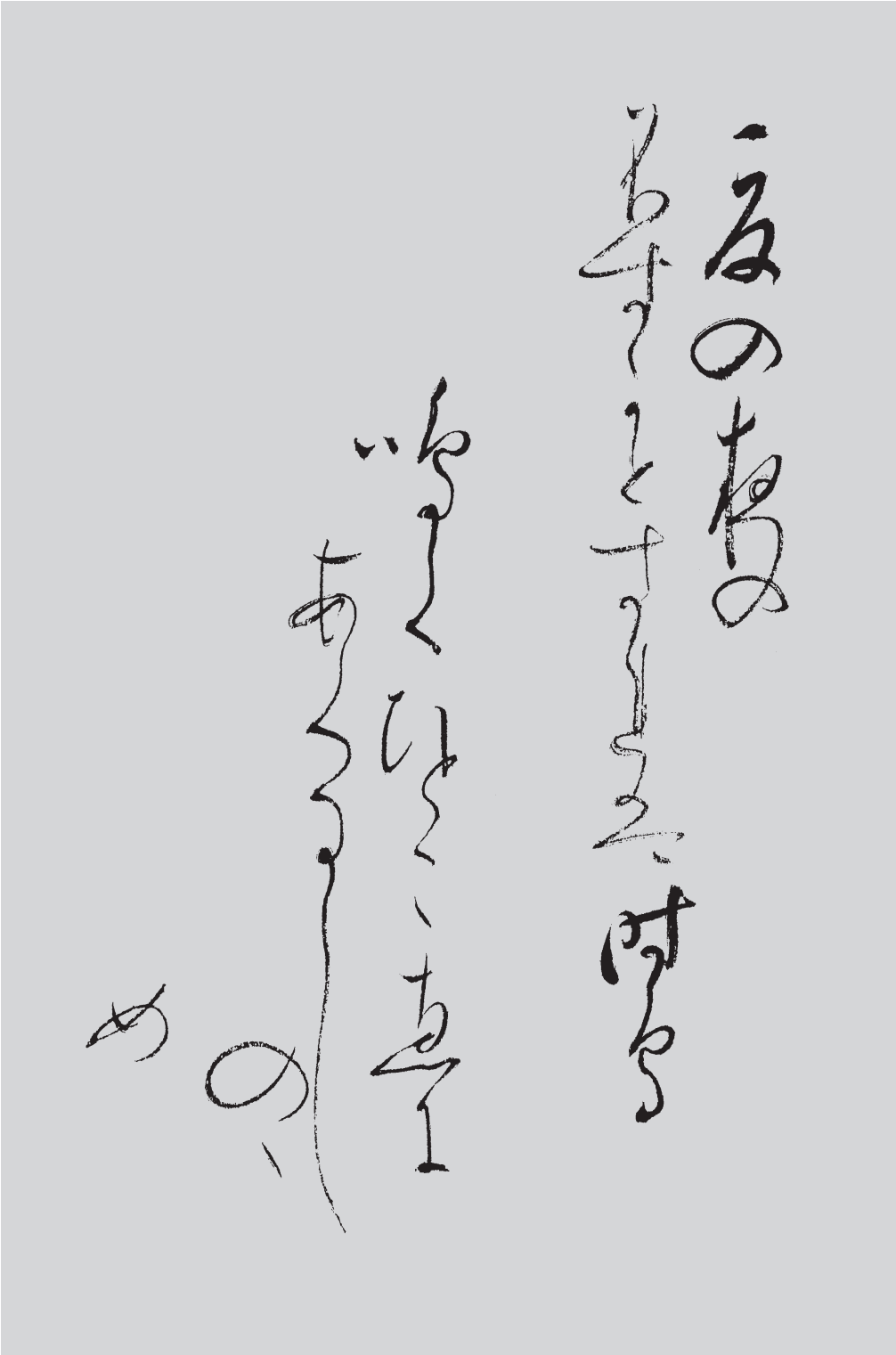
◆注 意　裏表紙の昇試規定を参照のこと。

恬然樂吾真
恬然樂吾真
恬然樂吾真

昇試第二部かな課題　（九月二十二日締切）

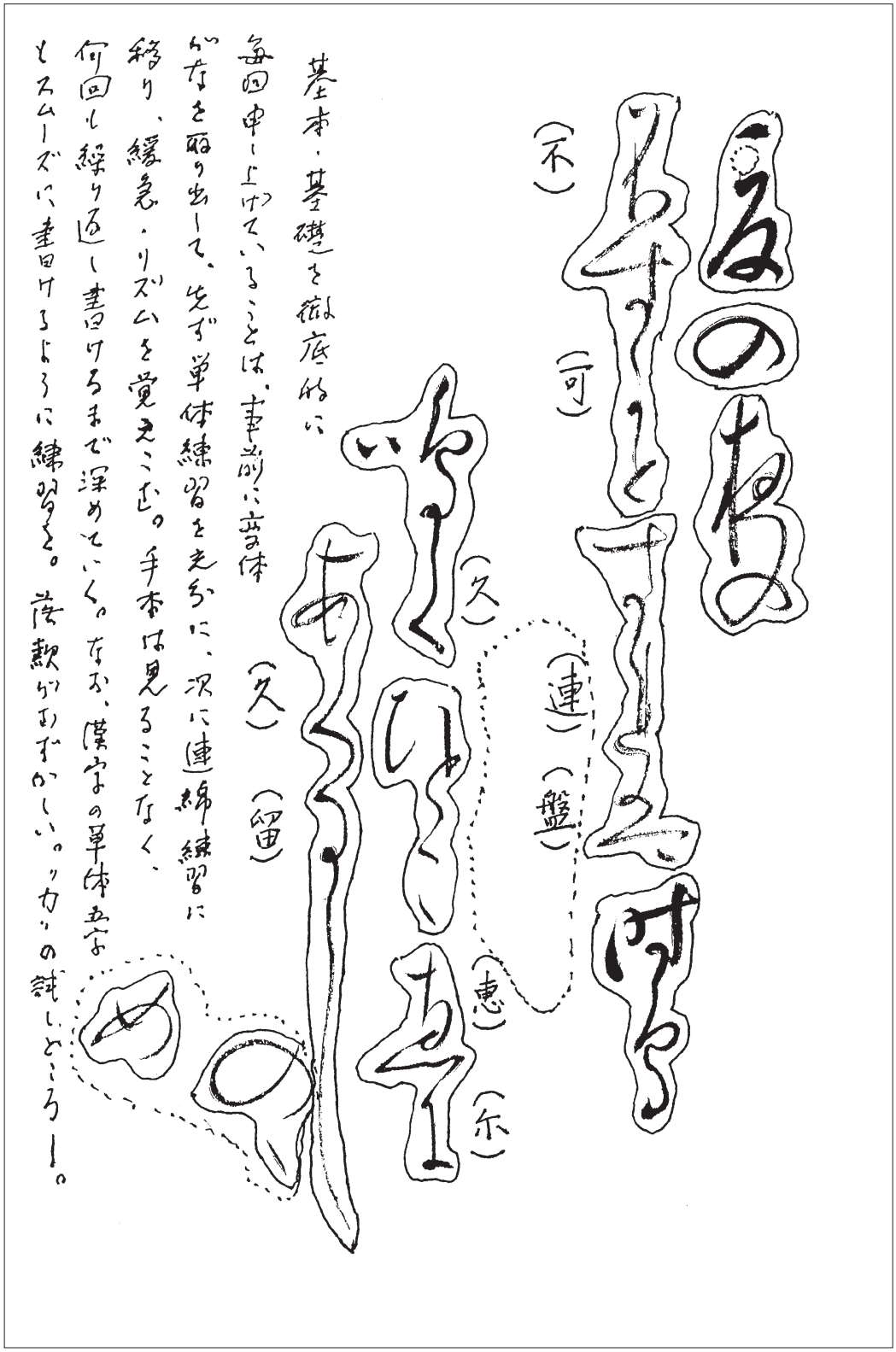
高塚竹堂先生書

夏の夜のふすかとすればほとゝぎすなくひとこゑに明くるしのゝめ（古今和歌集　紀貫之）



◆注 意　裏表紙の昇試規定を参照のこと。

昇試第二部かな課題　解説　鈴木静村



基本・基礎を徹底的に
毎回申し上げていることは、事前に音体
かなを取り出して、先ず単体練習を充分に、次に連綿練習に
移り、緩急・リズムを覚えること。手本は見ることなく、
何回も繰り返し書けるまで深めていく。なお、漢字の単体五字
とスムーズに書けるように練習を。筆勢がむずかしい。ッカリの詳しいところ！。

昇試第三部漢字課題　（九月二十二日締切）

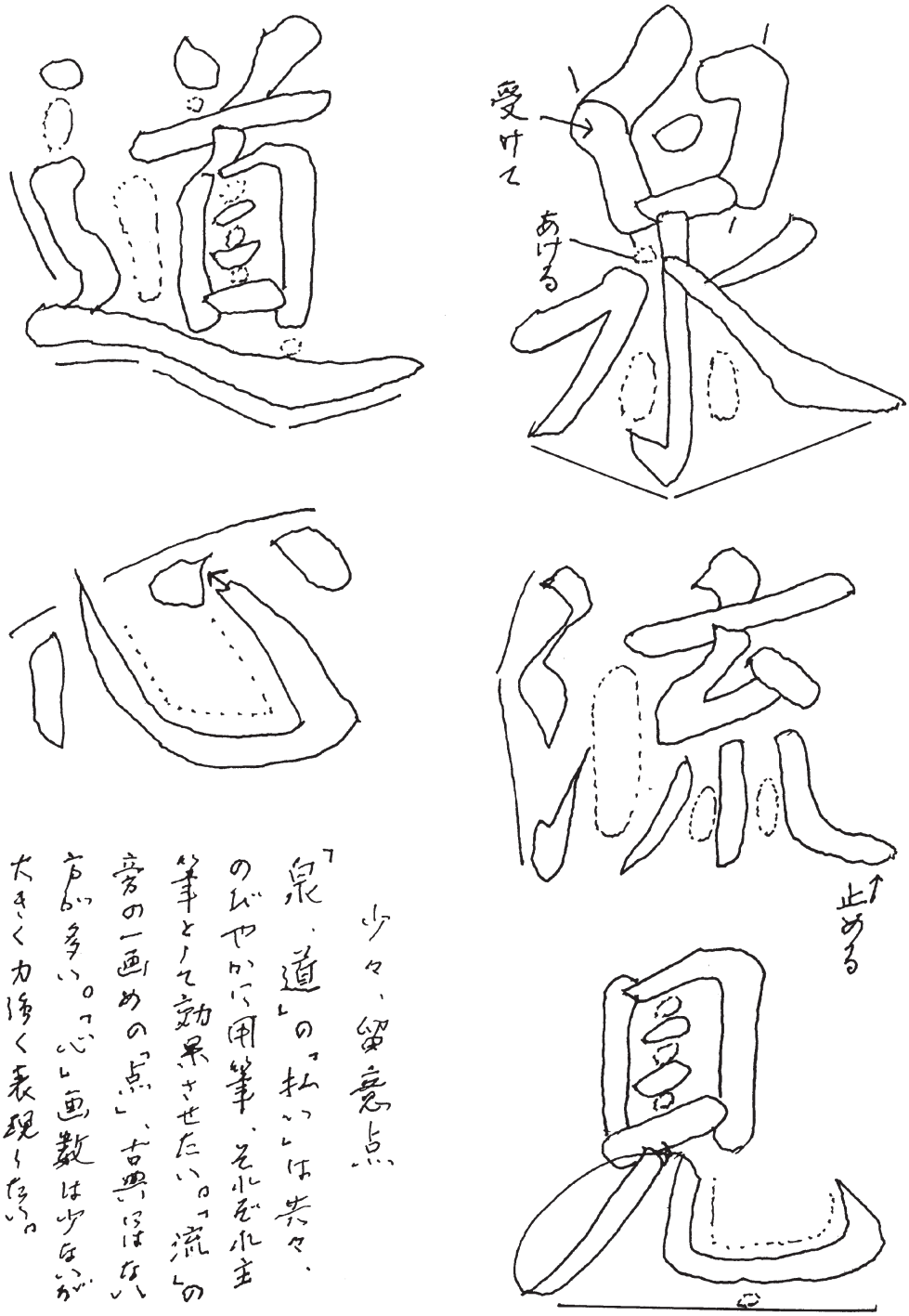
平岡華雪先生書

泉流れて道心を見る（荘宝書）

訳…（行く雲に禅の意を知り、）流れる泉に道の心を見る。

◆注意　裏表紙の昇試規定を参照のこと。

昇試第三部漢字課題　解説　鈴木静村



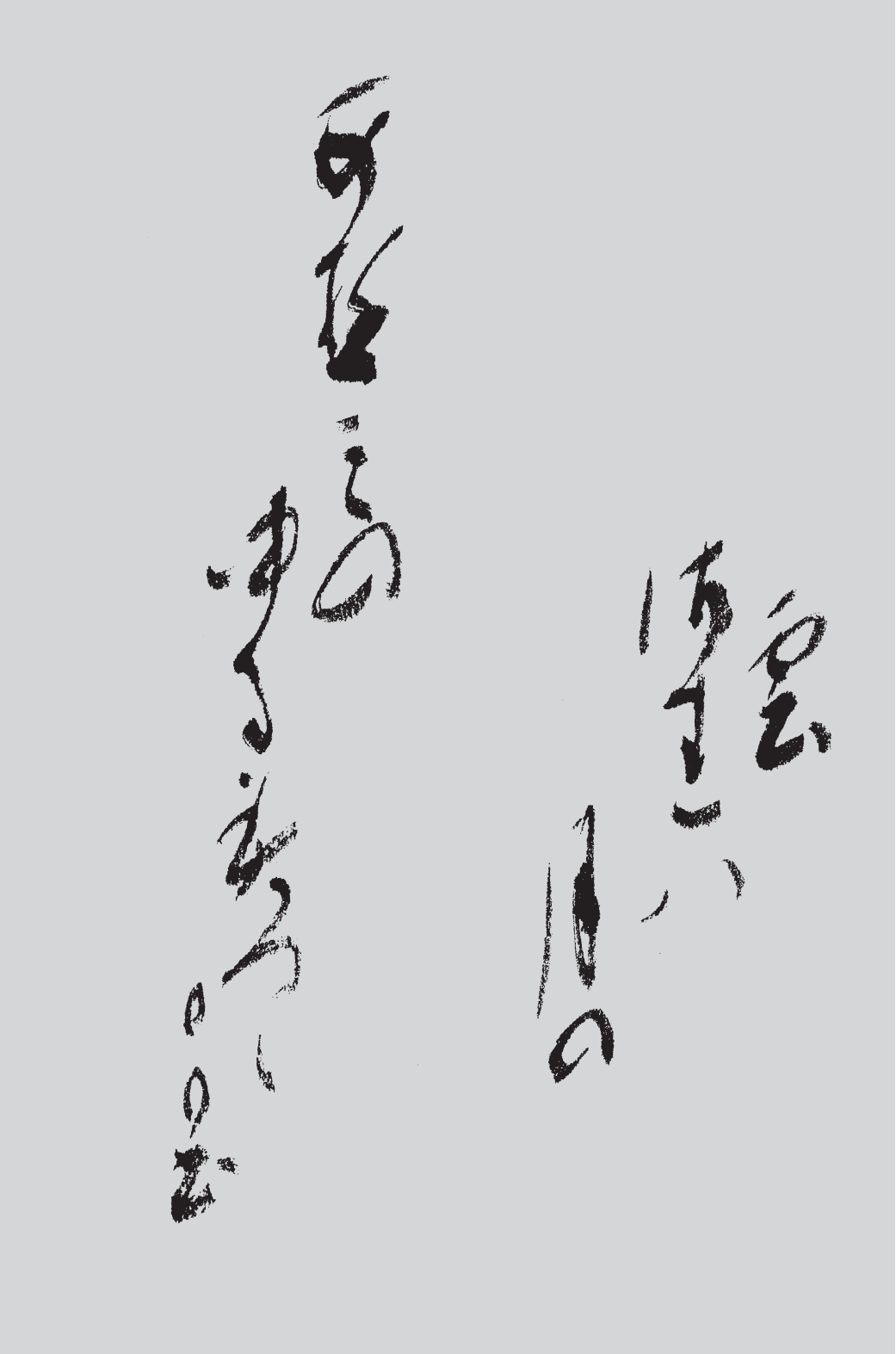
少々、留意点

「泉、道」の「払い」は共々、のびやかに用筆、それぞれ主筆として効果させたい。「流」の旁の一画めの「点」、古典にはない方が多い。「心」画数は少ないが大きく力強く表現したい。

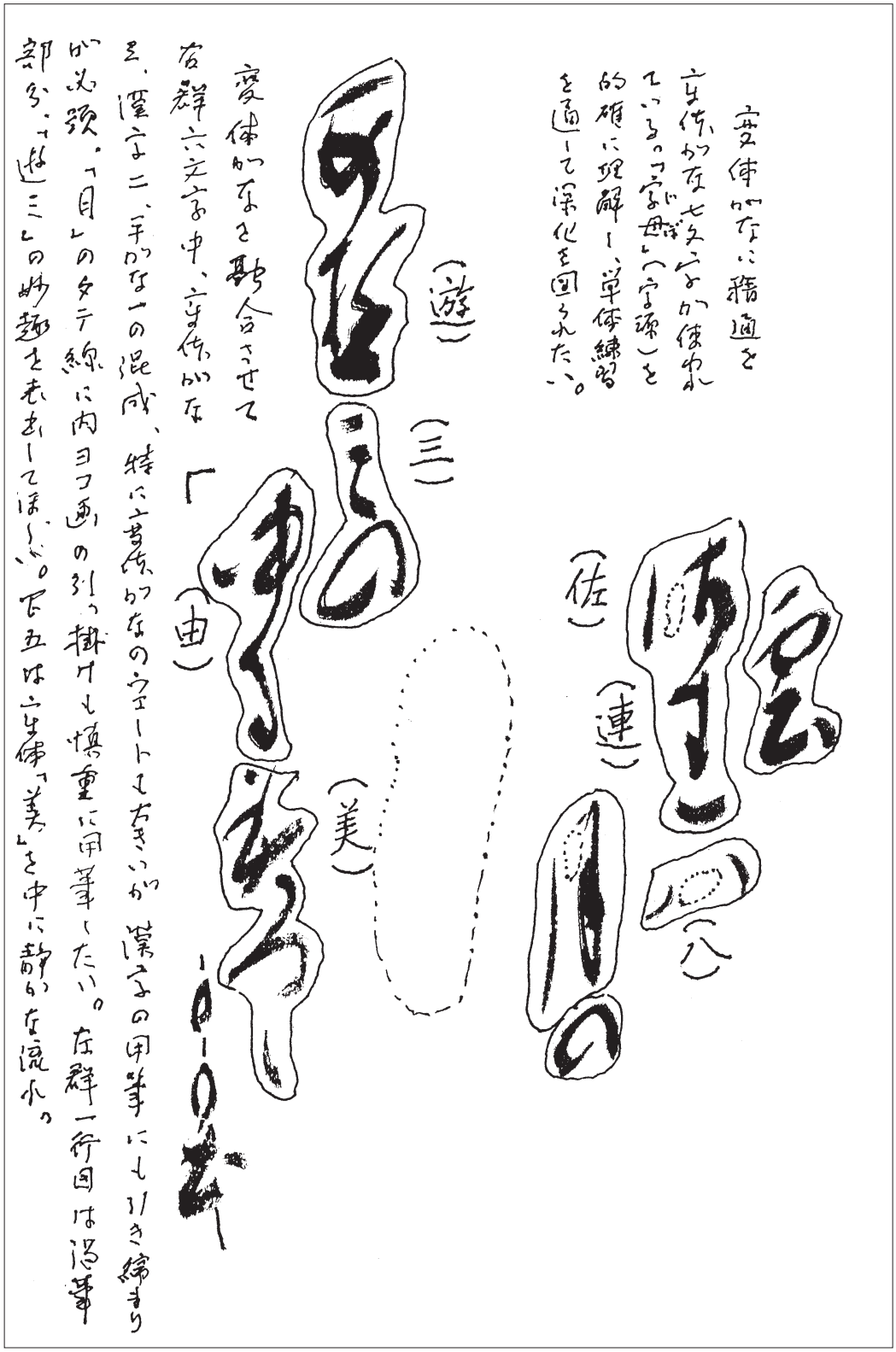
昇試第三部かな課題　（九月二十二日締切）

平岡華雪先生書

雲去れば月の歩みのゆるみつゝ（たかし）



◆注意　裏表紙の昇試規定を参照のこと。


変体かなに精通を
立体かな七文字が使われている「字母」（字源）を
的確に理解し、単体練習
を通して深化を図られたい。
（佐）
（連）
（八）
（遊）
（三）
（由）
（美）
変体かなと動合させて
右辺六文字中、立体かな
三、漢字二、平かな一の混成、特に立体かなのウエートも大きいが漢字の用筆にも引き締まり
が必須。「目」の左下線に内ヨコ画の引っ掛けも慎重に用筆したい。左辺一行目は沿筆
部分、「遊」三」の妙趣を表出してほしい。下五は立体「美」を中に静かな流水の

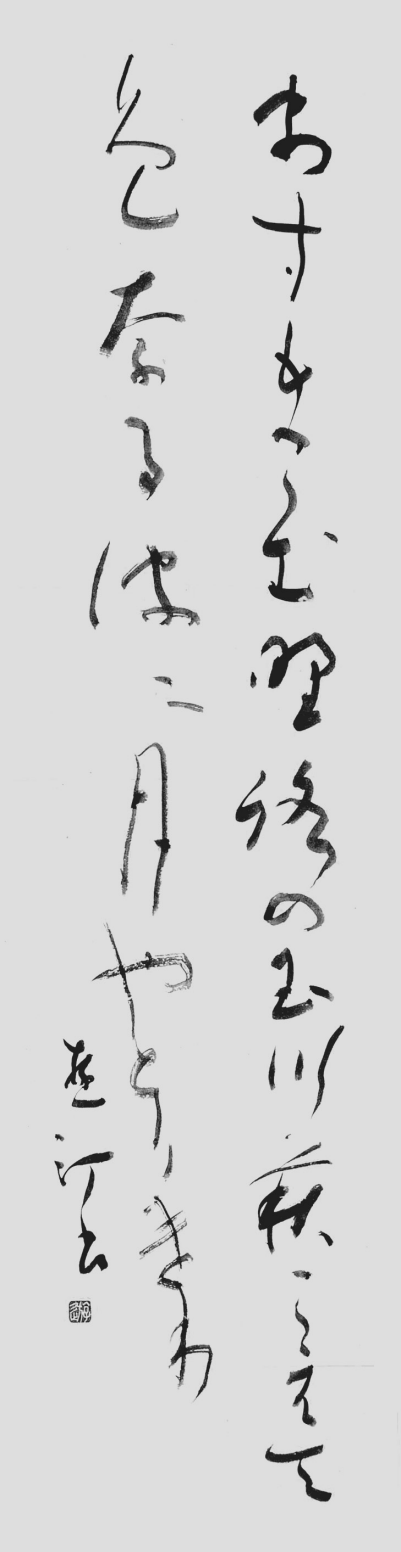
水貝潮華先生書

含風竹影淡留月　著雨蛩聲深怨秋（范石湖）

風を含むの竹影淡に月を留め、雨を著くるの蛩声深く秋を怨む。

訳…竹の影は風をおびてうっすらと月を宿し、こおろぎの声は雨をおび深く秋を怨むように聞える。

立川遊汀先生書



あすもこむ野路の玉川萩こえていろなる波に月やどりけり（千載和歌集　源俊頼）

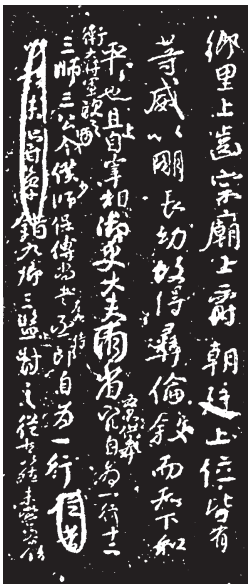
あ寸もこむ野路の玉川萩こえ天色奈る波に二月やどり遣利

◆注 意　裏表紙の昇試規定を参照のこと。

北沢博舟先生担当　争坐位文稿　唐　顔真卿　（七〇九―七八六）

※条幅臨書部は出品料無料です。

宰相御史大夫兩省　形式―半切タテ一行書　落款左行へ調和よく「〇〇臨」と書き入れる



顔氏家廟碑（整本）建中元年（七八〇）

裴将軍詩

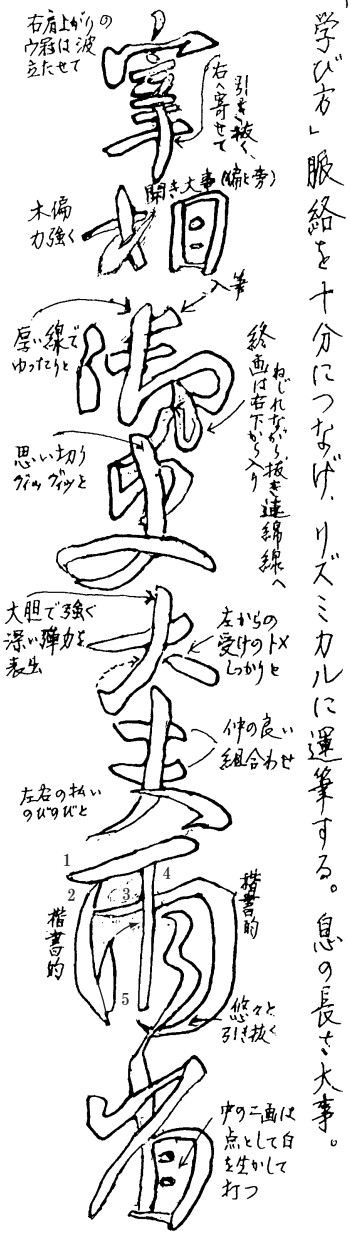
「ご参考まで」

顔真卿は、その七十七年の生涯において百種類もの作品を残しました。そして、その作品は文字の表情が作品ごとに異なるものとも言われています。ここに楷書作品の一つ「顔氏家廟碑」を掲載してみました。如何でしょうか。米芾は顔真卿の楷書に関しては批判的で〝作意が多すぎて平淡天成の趣がない〟と評していますが、どう思われますか。又「裴将軍詩」も掲載してみました。楷・行・草・篆隷の書体が混在した〝破体書〟とも呼ばれるものです。この書は、顔真卿の作品の中でも独特なものとされています。

ここしばらくの間、**「争坐位文稿」**と取り組んできましたが、その粘着質な線（じっくりと紙の中に筆先が入ってゆく）や意識を集中し筆の弾力を十分使って書き上げてゆく、むずかしさを体得しています。

臨書によって書的技術をより一層修練し、豊かな土台を作っておくことで、〝自分の書作品〟への一歩になるのではないか、と、つくづく認識を新たにし、この場を与えて下さったことに深く感謝しているところでございます。

「学び方」服絡を十分につなげ、リズミカルに運筆する。息の長さ大事。



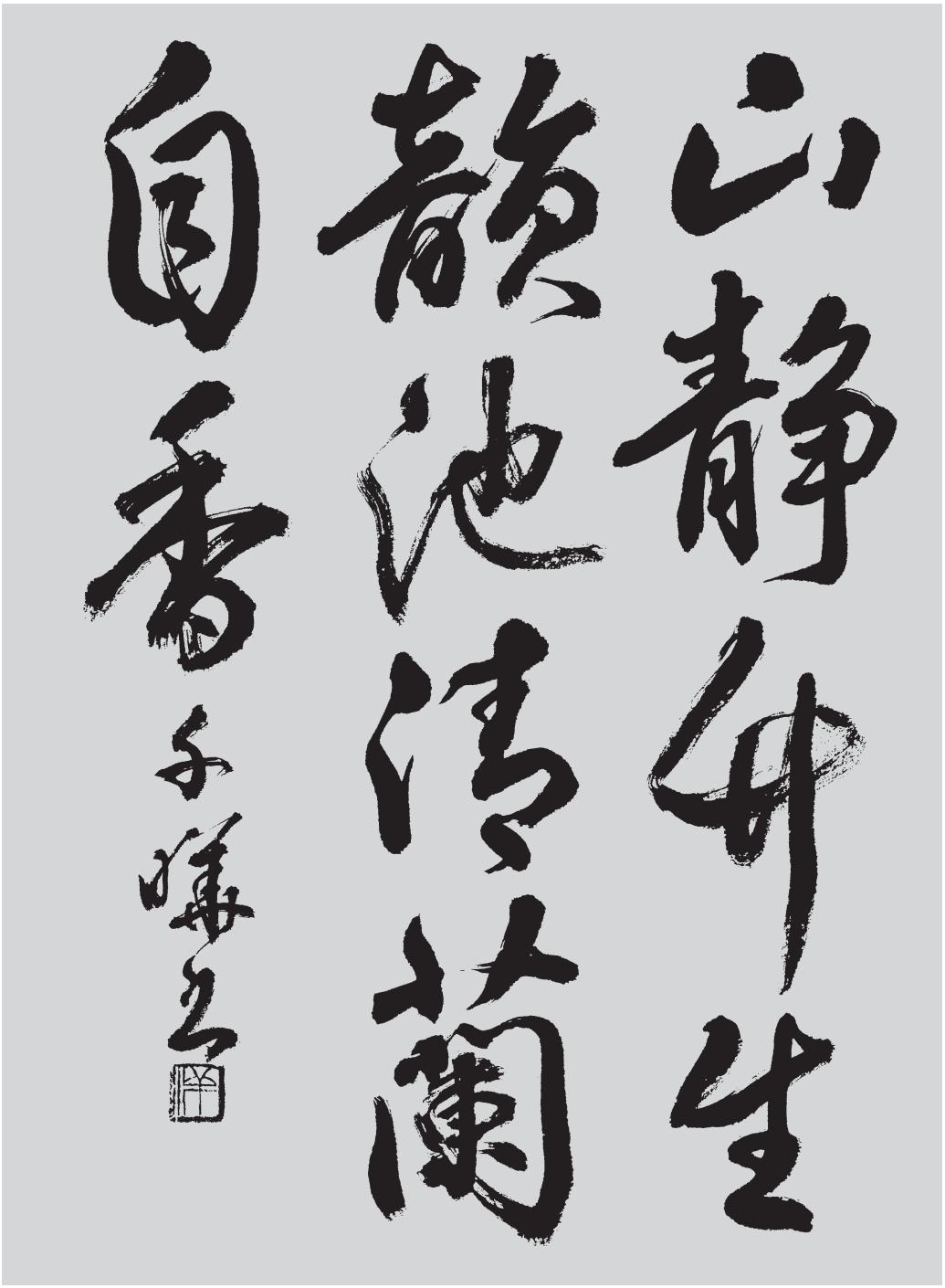
「参考資料」
中国法書ガイド　争坐位文稿
書道技法講座　顔真卿
顔真卿　星弘道　以上　二玄社
墨　209号　芸術新聞社

◆注　意　裏表紙の昇試規定を参照のこと。

路川千曄先生書

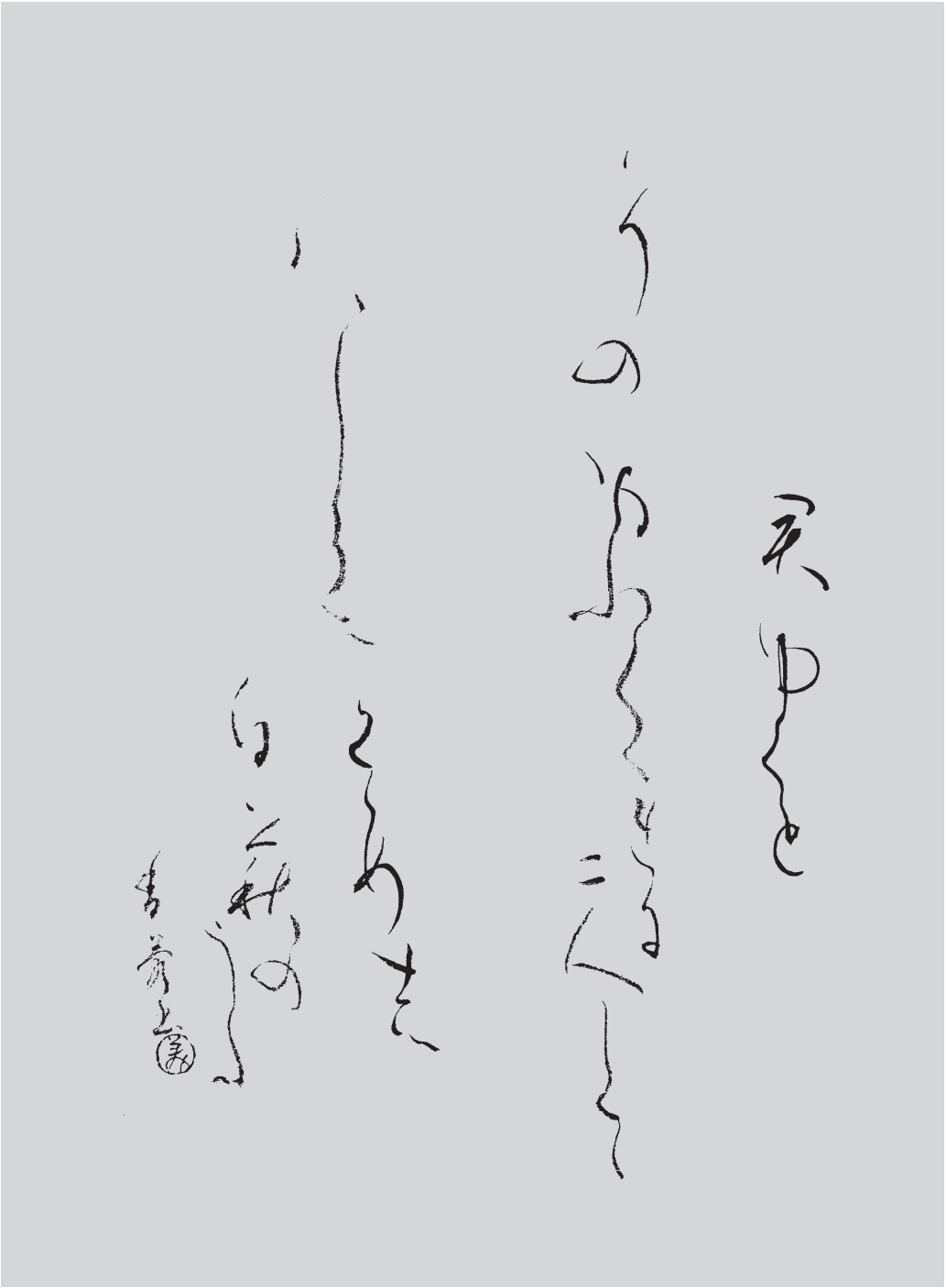
山静竹生韻　池清蘭自香（李彌遠）

山静に竹韻を生じ、池清く蘭自ら香し。



訳…山は物静かにして竹はすずしい声を生じ、池は水清く蘭も自然に香ばしい。

◆注 意　裏表紙の昇試規定を参照のこと。



川上香蓉先生書

君ゆくとその夕ぐれに二人して柱にそめし白萩の歌（与謝野晶子）

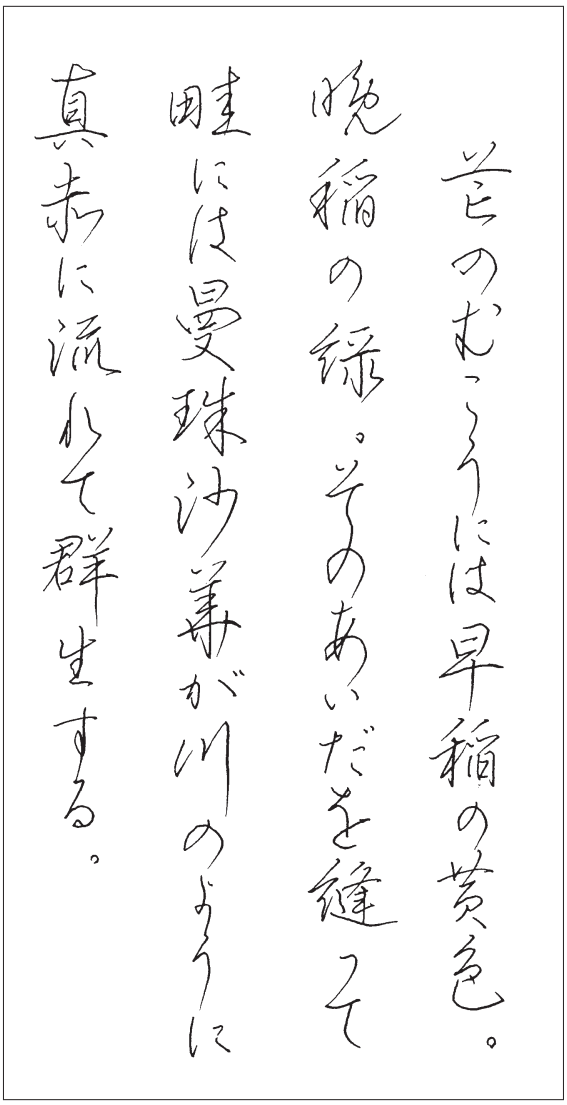
君ゆくと曽のゆふく連尓二人して八しら二そめ志白萩のう多

◆注 意　裏表紙の昇試規定を参照のこと。

硬筆部課題参考　（九月二十二日締切）

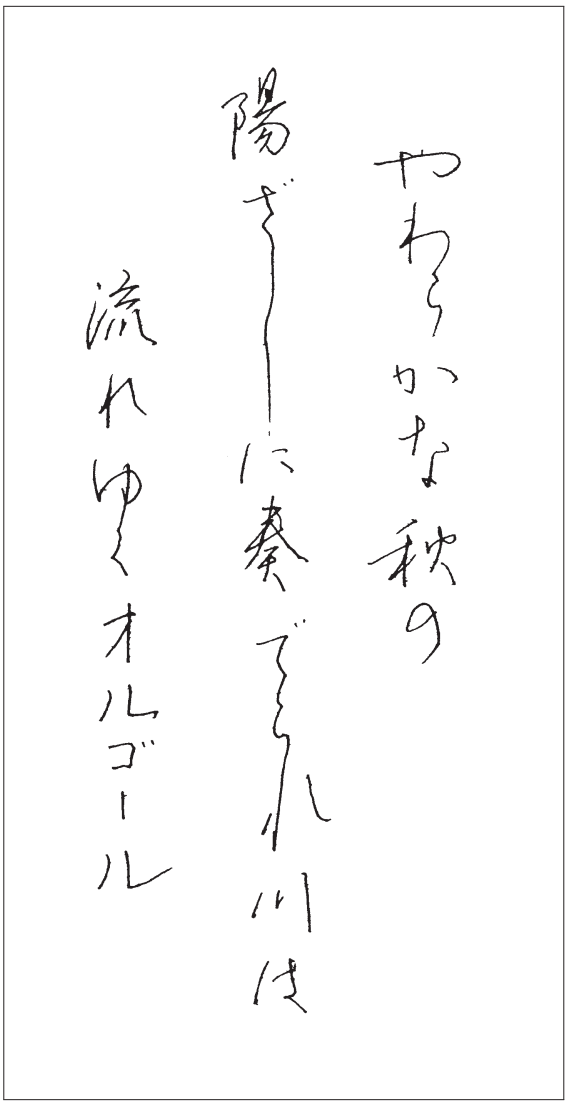
路川千曄先生書

課題 1　（初段以上）



湯澤春翠先生書

課題 2　（初段格以下）



課題1（初段以上）

芒のむこうには早稲の黄色。晩稲の緑。そのあいだを縫って畦には曼珠沙華が川のように真赤に流れて群生する。

「曼珠沙華燃ゆ」三枝和子

◆注意

(1) 自分の段級に合った課題を選択。
(2) ペンまたはボールペン（黒色）を使用のこと。青インクは不可。
(3) 段級欄は本人が記入（色は黒）
(4) はじめて出品される方は私製の紙（3×4㎝位に）次の4項目を記入して作品左下隅に貼って出品して下さい。①硬筆部②支部名または都道府県名③氏名または雅号④新
(5) 会員は無料・会員外は四〇〇円
(6) 添削希望者は直接担当の先生にお申込下さい。（返信用封筒に自分の住所・氏名を記入し、切手を貼って同封のこと。）

課題1　六〇〇円
課題2　三〇〇円

課題1　路川千曄先生　〒二〇七―〇〇二三
東大和市向原五ノ一〇九一ノ四
課題2　湯澤春翠先生　〒三七一―〇〇一六
前橋市城東町一―二九―五

課題2（初段格以下）

やわらかな秋の陽ざしに奏でられ川は流れゆくオルゴール

「会うまでの時間」俵　万智